

Maṇimēkalai における *tuṟavu*

宮本 城

I. はじめに

タミル文学には数々の叙事詩があるが、それらの中でも最古層に属する叙事詩に、次の二つがある。

1. *Cil.*

6世紀頃の作品。3編30章からなる。作者はジャイナ教徒イランゴー・アディハル。大商人の息子コーヴァランは、同じく大商人の娘カンナギと結婚したものの、高級遊女マーダヴィにおぼれ、彼女との間に娘マニメーハライをもうける。しかし、その後コーヴァランは没落し、妻カンナギと共に再起をはかる途中に非業の死を遂げる、という筋である。

2. *Maṇi.*

6~7世紀頃の作品。30章からなる。作者はサーッタナール。*Cil.*の登場人物コーヴァランとマーダヴィとの間に生まれた娘マニメーハライを主人公とし、遊女という家業を捨てた彼女が、幾多の困難・障害にもめげず真実の教えを求め続け、仏の教えを聞いて、ついには輪廻からの解放を目指す、という物語である。

以上の梗概からも分かるように、これら2つの叙事詩は、登場人物や筋書きの上で関係が深く、そのため、古来「双子の叙事詩」と呼ばれている。本稿は、後者の *Maṇi.* の主人公マニメーハライがいつ出家したのか、その解釈の要となる *tuṟavu* という語に焦点を絞り、論じてゆく。

II. 問題の所在

Maṇi. で、女主人公マニメーハライについて、宝石を帯び、美しい髪に花を飾っている姿が、物語を通じて以下のように描かれている。

花のつぼみをとっぺんにつけた髪は緩んで後ろに落ちて¹,

[マニメーハライは] 嘆き、助けを求めて叫び、悲しんだ。

(*Maṇi.* 8:36-37)

金の腕輪をつけた女² (マニメーハライ) よ。

(*Maṇi.* 12:33)

花をつけた黒い髪の女³ (マニメーハライ) は、

偉大な苦行者の聖なる足を3回拜んで...

(*Maṇi.* 12:5-6)

美しい宝石をつけた女⁴ (マニメーハライ) は、...

(*Maṇi.* 26:1)

良い匂いを放つ髪をした女 (マニメーハライ) よ。

(*Maṇi.* 26:62)

「花を飾った髪」というような表現や、結んでいた髪が緩むという描写は、彼女が髪を長く伸ばしているという印象を与えるものである。しかし、一方で、彼女が「比丘尼の姿」をしている、と描写されている箇所もある。

マニメーハライは母と共に、ひれ伏して [師匠アラヴァナを] たくさん拜んで、
神の鉢を手にとつてつかみ、

比丘尼⁵の姿で、大きな通りに着いた。

(*Maṇi.* 15:55-58)

マニメーハライに対して、このような矛盾した描写がなされていることから、彼女の出家については、物語の冒頭からすでに出家している、あるいは、物語の最後で出家したなどの説があり⁶、いまだ確定には至っていない。

マニメーハライの出家についてのこのような議論において、解釈の要となる用語のひとつが *turavu* である⁷。*turavu* は動詞 *tura* から派生した動名詞形である。動詞 *tura* は *DEDR* 3365 によると、“to leave, relinquish, forsake”, *Tamil Lexicon* は、“to renounce worldly pleasures, to leave”などの意味を挙げている。そして、*Maṇi*. を含めたタミル文学作品では、*turavu* や動詞 *tura* は「(物などを)捨てる(こと)」という意味で一般的には用いられている。

彼女の出家に関する議論において、この *turavu* は、「出家すること、すなわち、(尼)僧になること」と解釈されている。しかし、*Maṇi*. は完全な形で現存する唯一のタミル仏教叙事詩であり、さらに古い注釈が伝わっていないことから、語句の意味が不明確な場合が多数ある。

したがって、本稿では *Maṇi*. に先行するタミル古典文学、*Maṇi*.、および *Maṇi*. と深い関わり合いを持つ *Cil*.、さらに両叙事詩と同じ頃の箴言作品における *turavu* の用例を検討し、*Maṇi* における *turavu* がどのように解釈できるかを検討する。

III. *turavu* の用例

1. サンガム文学⁸における *turavu*

サンガム文学の中では、*turavu*、及び動詞 *tura* は、下記の例のように、ただ「(物などを)捨てる」という意味で用いられていることが多い。特に恋愛詩の中で「(恋人を)捨てる」という意味で頻繁に用いられている。

親切も愛情も捨てて、[私という]連れ合いも捨てて、
[あの男は]財産のために[私と]別れようとしている。
[彼がそのような]賢い人であるなら、賢い人でいなさい。

女友達よ、私達は無知な女でいましょう。

(*Kuṇṭtokai* 20)⁹

しかし、次のように、厭世的な文脈で *turavu* が用いられている用例がある。

(略)

[葬式という]嫌な日が来ないうちに、
海を境とするこの世界を、すべてすぐに捨てて、

あなたが正しいと考えた行為をしなさい。

(*Puraṇāṅgūru* 363: 16-18)¹⁰

この詩節で *turavu* は、「[この世界を]捨てる」という意味、すなわち「遁世」という意味あいでも用いられていると考えられるが、このような用例はサンガム文学では稀である。また、この詩節にはこれ以上の具体的な情報はなく、たとえ、この *turavu* が「遁世」という意味であったとしても、これを「出家、すなわち、僧になること」という意味に解釈することはできないであろう。

2. 箴言詩における *turavu*

サンガム文学より後代の箴言詩 *Kuṛaḷ*¹¹と *Nāl*.¹² には、*tuṛavu* という章が設けられている。したがって、サンガム時代には、「捨てること」という意味しか持たなかった *tuṛavu* が、これら両箴言詩が作られた時代になると¹³、一語だけで、章の題目となりうるだけの意味を持つようになったと思われる。*Maṇi*. には、*Kuṛaḷ* の第 55 詩節が「偽りなき詩人の言葉」として、そのまま引用されていることから、*Maṇi*. が作られた時代にすでに、*Kuṛaḷ* は名声を得て、広く人々の間に知れ渡っていて、*Maṇi*. の作者も *Kuṛaḷ* の影響を受けていたことは間違いない。

2. 1. *Kuṛaḷ*

まず、以下に *Kuṛaḷ* の *tuṛavu* と題された第 35 章の詩節を挙げる。

[それが] 何であっても、捨てる者は、

それによる苦しみを得ることはない。 (341)

捨てた後にこの世で、喜びはたくさんある。

望むのなら、生じた時に、捨てるべし。 (342)

5つの感官を制御しなくてはならない。

望んでいたすべてを捨てなくてはならない。 (343)

1つも所有しないことが、苦行の性質である。

所有することが転じて、再び、執着の原因となる。 (344)

再生を断ち切ることを望む者には、体も余計なものである。

その他にどんな余計なものがあるか。 (345)

私、私のもの、という驕りを断ち切る者は、

神よりも高い世界に行く。 (346)

欲望に執着して捨てない者に、苦しみは取りつき、去ることはない。 (347)

すべて捨てた者は、最高の状態を得る。

そうでない者は [迷いという] 網に捕えられる。 (348)

執着が断たれた時、再生が断たれる。そうでなければ、無常が理解される。 (349)

執着を断ち切った者の望む物を求めるべし。

執着を断ち切るために求めるべし。 (350)

一般的に *Kuṛaḷ* の詩節は簡潔で、広い解釈が可能であるので、詩節の内容から *tuṛavu* の意味を明確に限定することは困難である。この章の内容から判断すれば、まず、次の2通りの解釈が可能であろう。

この章では、繰り返し「執着を捨てる」ということが述べられている。したがって、この意味を重要視すれば、ここでの *tuṛavu* を「執着を捨てること」と解釈することが可能である。

第 344, 345 詩節の内容は、俗世間を捨てることについて述べているとも考えられる。したがって、これらの詩節を中心としてこの章をとらえた場合、「捨てること」という *tuṛavu* の元の意味から解釈して、ここでの *tuṛavu* を「(執着を捨て) 俗世間を捨てること」、「遁

世」と解釈することも可能である¹⁴。

しかし、いずれにせよ、この章の *turavu* は「出家、すなわち、僧になること」を意味するものではない。

2. 2. *Nāl*

Nāl 第1編第6章の詩節は以下の通りである。

明かりがやって来ると、闇が消えるように、男の苦行の前に、
罪が現われることはない。明かりの油が少ない場所に、闇がやって来て広がるように、
良き行いがなくなった場所には、悪が存在する [ようになる]。 (51)

無常、苦しみ、老い、死 [がある] と考えて、優れた人々は義務を果たす。
[学習が] 終わることのない7つ [の学問] や天文学というようなものについて、
あれこれ話す愚か者より、愚かな者はいない。 (52)

家、若さ、美しさ、優雅、富、力、というこれらすべてが、弱く無常なものであると
知って、優れた人は、自身が救われるために時間を延長することなく、
[これらを] 捨てる。 (53)

愚か者は、苦しみによって、長い間苦勞しても、少しの間の快樂を望む。
[知識に] 満ちて、[感官を] 制御した人は、快樂を良く見極めた後、
苦しみを見て、家長の道を捨てた。 (54)

虚しく若さは過ぎ去った。今や苦しみと共に老いがやって来ている。
したがって、自信が備わり、心は私と共に良く考えずに [勝手に] 動いてしまう。
知恵よ、良き道が一体我々にやって来るのだろうか。 (55)

すぐれた美德もなく、子供を産まなくても、夫が [妻を] 捨てることは
困難であるので、結婚した [ことによる] 苦しみという理由から、
昔の賢者は [結婚に対して] 恐怖と言った。 (56)

努力して担った誓戒を破るような、抗し難い苦しみが自分にやって来た時、
[その苦しみを] 取り除いて [脇に] おく力を持つ人は、
良き習慣を守る幸福な人である。 (57)

自分に対する [他人の] 輕蔑を我慢することだけでなく、「自分を輕蔑した罪の果に
より、来世で [あの男は] 火に満ちた地獄で生きるだろう」と言って、
哀れむことが賢者の義務である。 (58)

体、口、目、鼻、耳、という名の5つの道から欲望、貪欲から
混乱することなく [自らを] 守り、[それらを] 追い払う力を持つ者は、
迷うことなく解脱を得る。 (59)

無知な者は、苦しみが増すのを見ても、執着を捨てる心を持つことなく、快樂を望む。
賢者は、快樂を得る度に、その苦しみを考えて、[快樂を] 望まない。 (60)

Nāl における *turavu* の章の内容は、*Kuṣṭhā* に比べるとやや具体的である。この中で重要な
のは、第54詩節に「家長の道を捨てた」という表現が登場することである。したがって、
ここでの *turavu* を「出離あるいは遁世」と考えることもできるが、*Nāl* の注釈はこの章を

「執着を捨てること」について述べたものであると解釈している。

Nālは *Kura!*の強い影響を受けていると言われている。しかし, *tuṛavu* を編の後半に置く *Kura!*の構成とは異なり, Nālの第1編は *celvanilaiyāmai* (富の無常), *iḷamainilaiyāmai* (若さの無常), *yākkainilaiyāmai* (体の無常), *aṇṇavaliuṛuttal* (徳の力), *tūyṭaṇmai* (身体の不浄), *tuṛavu* (執着を捨てること), *ciṇamiṇmai* (怒らないこと), *poṛaiuṭaimai* (忍耐を持つこと), *piṛarmanaiyavāmai* (他人の妻を望まないこと), *paḷaviṇai* (古き行ない), *ikai* (施し), *meymmai* (真実語), *tiviṇaiyaccam* (業の恐ろしさ), という構成になっている。このような章立てから考えた場合, ここでの *tuṛavu* を「俗世間を捨てること」, 「遁世」と捉えることは困難である。また, その他の詩節の内容は多様であり, 必ずしも「出家」について述べているわけではないので, ここでの *tuṛavu* を「出家」と限定することは不可能である。

このように, これら両箴言詩における *tuṛavu* の章の内容から考えた場合には, *tuṛavu* は「執着を捨てること」, 「遁世」など, 広く解釈できるようになったといえることができる。しかし, だからといってそれが直ちに「出家, すなわち, (尼) 僧になること」を明らかに述べていると考えることはできない。また, これらの作品の中においても, *tuṛavu* や, 動詞 *tuṛa* は, 単に「(物を) 捨てる (こと)」という意味でも多数用いられていることにも注意する必要がある。

3. *Maṇi*. における *tuṛavu*

マニメーハライの母は, *Maṇi*. の中で次のように自分が仏に帰依した経緯を語る。この時, 彼女は *tuṛantēn* (動詞 *tuṛa* の1人称単数過去形) と述べている。

私は執着を捨てた (世を捨てた)。

(中略)

私は, この偉大な苦行者 (アラヴァナ) が住む場所にやって来た¹⁵。

罪の性質の無い, 汚れなき [彼の言葉] を聞いて, アラヴァナの足元にひれ伏し, 非常に苦しみ, 混乱しながら, 夫が受けた苦しみを [アラヴァナに] 話した。

すると心強きアラヴァナは,

「生まれた者がうけるものは大きな苦しみ,
生まれない者がうけるものは大きな喜び,
執着に対してやってくるものは前者 (大きな苦しみ) であり,
[執着の] ない人がうけるものは後者 (大きな喜び) である,
と知れ。」

と言った。[さらに]

5種の戒¹⁶の性質をすべて示して,

「救われる¹⁷手段はこれだ, とれ。」

と言った。

(*Maṇi*. 2:41-69)

この部分によって, 彼女は「尼僧になった」と一般的には解釈されている。しかし, ここでは, 彼女は5つの戒を授かったにすぎず, 尼僧になったということは明らかではない。

また、その他の場面で、彼女が尼僧であると明らかに述べられている箇所は見当たらない。したがって、これまでに見てきた用例や文脈から判断した場合、ここは「執着を捨てた」、「遁世した」という解釈も可能であるものの、それがすなわち「出家、尼僧になった」と結びつくかどうかは速断できない。

また、カンナギ（マニメーハライの継母）が仏に帰依した時の様子を語る場面では、次のように「*tuṛavi*¹⁸の心が現われた」という表現がなされているが、彼女についても、ここで尼僧になったということは明らかではない。

[私（カンナギ）は]

コーヴァランと共に、ブツダ [を拜むため] の

七つのインドラ寺院¹⁹ を称えたので、

苦しみは起こらず、愛に満ちた心を持って、

ブツダの徳について聞いて、**執着を捨てる**心が現われ、（以下略）（*Maṃi.* 26:55-58）

このように文脈から判断した場合、*Maṃi.*における *tuṛavu* は「出家、すなわち尼僧になること」という意味に解釈することは困難である。

また、*Maṃi.*には様々な登場人物が、仏に帰依した時の経緯を語る挿話が、所々に挿入されている。例としてマニメーハライの女友達の挿話を次に挙げる。以下は、マニメーハライの女友達スタマティが、かつて、父の命を助けてくれた聖者の所で次のような話を聞いて、仏に帰依したと語り始めるくだりである。

聖者サンガダルマンは、我々に対して [以下のことを] お話し下さった。

「ブツダは生来の美德を持ち、間違いのない美德の対象である。

（中略）

[ブツダは]

喜びの時²⁰ を人々が得ることができるよう、恵みという美德を担った。

[そして] 大きな決意を持って、

徳の法輪²¹を、[人々が] 栄えるように回して愛欲に打ち勝った。」

ブツダの足を讃えること以外に私の舌は何も話さない。（*Maṃi.* 5:70-79）

このような挿話は、先に挙げたマニメーハライの母が仏に帰依した話と同様に、一般的には「出家、(尼) 僧になった」時の話と考えられているが、実際にはどの話もあいまいで、具体性を欠いており、登場人物が「出家した、すなわち、(尼) 僧になった」という強い印象を与えるものではない。

また、*Maṃi.*の中には、聖者（マニメーハライや母の師匠アラヴァナなど）が登場する。彼らに対して繰り返して用いられる代表的な表現は「偉大な苦行者」²²で、マニメーハライの師匠やブツダは次のように表される。

苦行の道を行くブツダ (*Maṃi.* 28:150)

偉大な苦行を行う者 (*Maṃi.* 15:55)

罪を断ち切る偉大な苦行者 (*Maṃi.* 21:16)

この苦行をする女という表現は、マニメーハライに対しても常套句として、頻繁に用いら

れている。

彼女（マニメーハライ）は業の結果、苦行をする女である。 (Mam. 5:12-22)

苦行の性質を担った女（マニメーハライ） (Mam. 7:13)

しかしながら、この「苦行する」あるいは「～の苦行者」という表現は、同時に王など明らかに出家していない人に対しても用いられているので²³、「苦行する女」という表現を根拠として、マニメーハライを出家者、すなわち、尼僧であると決められないであろう。

したがって、Mam.の挿話や描写から、turavu について「出家、すなわち、(尼)僧になること」という解釈を行なうことは不可能であると思われる。

4. Cil. における turavu

Cil.における turavu はこれまでの用例と違い、「出家、すなわち (尼)僧になること」という意味を持つものが含まれている。

[ある時、王が尋ねた.]

「マニメーハライとは誰だ。その女の**出家**²⁴の理由は何だ。」

(中略)

[すると、1人の女がマニメーハライの出家の様子を話し始めた.]

(中略)

[マーダヴィは]

「来なさい。私の無垢な娘マニメーハライよ。」と言って、

(中略)

コーダイの花輪と宝石を取り除き、同時にマニメーハライの髪を引き抜いて、
ボーディの布施²⁵をして、徳を行った。 (Cil.30:1-28)

上記の挿話は、マニメーハライの turavu の様子についての描写であるが、この中の「花輪や宝石と共に髪を引き抜く」などの表現から、ここでの turavu は、「出家、すなわち、(尼)僧になること」という意味で用いられている、と判断することができる。「髪を引き抜く」²⁶という表現から分かるように、ここでの turavu はジャイナ教の性格を強く打ち出した「出家」である。

次の用例は、マニメーハライの祖父が寺に入った時の描写である。この場面の文脈は不明瞭ではあるが、寺にいる人は turantör (動詞 tura の3人称男性過去形)と表現され、祖父が寺に入ったことは「turavi に至った」と述べられている。したがって、ここでの turantör は「出家した人」、turavi は「出家」という意味で用いられている。

[マニメーハライの祖父は]

7つのインドラ寺に入って、そこで、空を行く300人の天空人のように²⁷、

生まれた体の[再]生を止めるために、努力を行ない、

出家者達 (turantör) の前で、**出家** (turavi) に至った。 (Cil. 27:92-95)

このように、Cil.における turavu は「出家、すなわち、(尼)僧になること」という意味に解釈できるが、この解釈を、Mam.にそのまま適用することはできない。

なぜなら、両叙事詩の間では、*Cil*の方が話の筋では先行しているものの、*Cil*の序章には、*Maṃi*が先に書かれたという記述があり、両叙事詩のどちらが先に書かれたかという前後関係、ならびに両者の間の影響関係は、いまだ確定されていないからである。次の章では、まずこの両叙事詩の前後関係についての問題をみることにする。

IV. 双子の叙事詩の前後関係をめぐる問題

*Maṃi*と*Cil*とは話の筋の上で共通する部分があるので、古来「双子の叙事詩」と並び称されてきた。話の筋上では*Cil*が先行しているために*Cil*が先に書かれたと一般的には考えられることが多い。この前後関係を決定するためには、両叙事詩に登場する挿話、人名、地名など、多くの要素すべてについての詳細な比較、考察を、歴史学の観点も含めた様々な観点から行うことが不可欠であり、本稿でそれらを取り扱うことは不可能であると言わざるを得ない。したがって、ここでは、前後関係についてどのような考え方をすることができるか、そして、どのような問題があるのかを提示する。

1. *Maṃi*の方が先に書かれたという説

*Cil*の序章では、*Maṃi*の作者サーツタンが、*Cil*の作者イランゴーに対して、*Cil*の物語を作るように求める話が次のように語られる。この話は、*Cil*のほうが先に書かれたという、一般的に考えられている順序とは反対の順序を示唆している。

彼（イランゴー）の近くにいた優れたタミルのサーツタンは、

「私はそれが起こったことを知っている。」

と言って、[*Cil*の梗概を] 話しはじめた。

（中略）

[それを聞いたイランゴーは]

「シラッパディハーラムという名前で我々は韻文の詩を作ろう。」

と言った。

「王冠をつけた王3人に [この話は] ふさわしいものである [から]、

あなた（イランゴー）がお作り下さい。」

と言ったサーツタンに対して、

（*Cil*の挿話が列挙される）

[このような] 挿話を間に置いた、散文が間にある詩を

名声に満ちたイランゴーが作った。

すると、マドライの穀物商人サーツタンは [それを] 聞いた。

（*Cil*序章）

このような序章の内容をふまえて、12世紀頃の注釈者 *Aṭiyārkkunallār* は、*Cil*に対する注釈²⁸の中で *Maṃi*の方が先に書かれたとしている。そして、この *Aṭiyārkkunallār* の記述に従って、*Maṃi*が先に書かれたと考える研究者²⁹ もいる。

*Maṃi*の方が先に書かれたと考える場合、*Maṃi*におけるカンナギやコーヴァランについての挿話を聞き手が理解できたかということがまず問題になる。前節でも述べたが、*Cil*

の話の筋すら知らない者が *Mami* の話を聞いたとしても、そこに登場するカンナギやコーヴァランについての話が何のことを意味するのか理解できないであろう。したがって、カンナギやコーヴァランの話までもが完全にサーッタナールの創作であり、*Mami* を通じてはじめて人々がそれを知ったと考えることはほとんど不可能である。

しかし、このことは、*Mami* の読者が *Cil* を知らなければ、カンナギやコーヴァランの話を知ることはできなかったことを意味しない。なぜなら、*Cil* の主題であるパッティニ信仰が *Cil* や *Mami* より古い時代にすでに存在していたことを示す記述³⁰があるからである。

*Narrinai*³¹ の 216 には、「片方の乳房を切った女」という表現が出てくる。これは、*Cil* の主人公カンナギが片方の乳房をひきちぎったことを想起させるものである。また、Zvevil や Brenda Beck は、コーヴァランの悲劇を主題とした、*Cil* に類似した民間説が今日に至るまで様々に伝わっていることを言及している³²。

このようなことから、*Cil* の原形となった説話が人々の間に浸透していて、その説話を利用して *Mami* が先に書かれたという可能性も十分考えられる。もちろん、*Mami* の中には明らかに、*Cil* より後世に書かれたと考えられる部分があるが³³、これは、*Cil* を知った後の時代に挿入されたものであるとみなすこともできる³⁴。

しかし、*Mami* が先に書かれたと考える上での問題点は、*Mami* の聞き手が *Cil* の源となった話のある程度知っていたという前提がない限り、成立しない点である。このような前提の存在を裏づける資料は、現時点では得られていない。

2. *Cil* が先に書かれたという説

話の筋の上では明らかに *Cil* が先行し、その内容を知らなければ *Mami* のいくつかの箇所は理解することはできない。これを主な理由として、多くの研究者が³⁵、*Cil* の方が先に書かれたと考えている。

例えば、*Mami* に登場するカンナギやコーヴァランについての話は、前後に何の説明もないまま語られる。*Cil* の主な筋を知らない限り、これらを理解することは困難である。特に、マニメーハライの父コーヴァランが無実の罪を帰せられて殺されたことは、*Cil* では重要なテーマである。*Mami* の中では、このことについて具体的な経緯は何も説明されず、しばしば、以下の例のように、「父もしくは夫がこうむった苦しみ」などとだけ簡単に述べられている。

父と母とが非常に苦しんだ、
そのひどい苦しみ、悲しみが耳の中を熱くして。
[父母に対して] 愛を持つ心は乱れて、
美しい女 (マニメーハライ) は... (Mami. 3:5-7)

悲しんだ女 (マニメーハライ) は、
父 (コーヴァラン) のことを思って、
「私をここにとらえるひどいカルマが現れた。」

優れた腕輪をつけた美しい女性（カンナギ）と共に、
他の土地（マドライ）へ行って、鋭い刃によって苦しんだ、
胸に宝石を帯びた父（コーヴァラン）よ。」

と言った。

(*Mami*. 8:39-43)

これらの挿話以前の章では、カンナギやコーヴァランといった名前、コーヴァランの苦しみ、カンナギがマドライを焼いたことなどの情報は、まったく語られていない。

また、コーヴァランが非業の死を遂げる要因となった前生での出来事は両叙事詩に登場するが、内容には若干の相違がある。これら2つの挿話を比較してみると、*Cil.*におけるこの挿話は、*Cil.*の記述に沿って読み進めればそのまま理解することができる。一方、*Mami.*での挿話は³⁶、具体的な描写が欠けていて、*Cil.*における挿話を参考にしない限り、理解することは困難である³⁷。

したがって、聞き手が*Cil.*の話を既に知っていることを前提として、これら*Mami.*における挿話は、語られていたとも考えられる。しかし、この考え方には、以下に述べるような問題点を含んでいるので、これらのことだけを根拠として*Cil.*が先であるとは確定できない。

まず、問題となるのは、前述したように*Cil.*の序章に*Mami.*の作者サーツナールが、*Cil.*を作るようにイランゴーに要請したという話があることである。もし、本当に*Cil.*が先に書かれているのなら、なぜ、このようなことが序章で語られるのであろうか。この序章における、両叙事詩の作者が同時代の人物であり、友人であったということは歴史的事実ではないとされることが多い。しかし、たとえ、それが事実でないとしても、*Cil.*が本当に先に書かれているのなら、序章の挿話は聞き手にとって不自然だったはずである。

次に問題となるのは、マニメーハライという仏教色の強い登場人物が、なぜジャイナ教徒によって書かれた³⁸ *Cil.*に現われたかという点である。マニメーハライは、仏教の女神であるマニメーハラー女神³⁹にちなんで名づけられた、という経緯が両叙事詩において語られる。仏教徒によって書かれた*Mami.*で仏教の女神にちなんで名づけられた登場人物が現われても不思議ではない。しかし、もしも*Cil.*が書かれた時に*Mami.*が存在していなかったとするなら、ジャイナ教徒によって書かれた*Cil.*で、仏教の女神にちなんで名づけられたマニメーハライが生まれ、さらに、仏教徒になる⁴⁰という話をあえて書く必要があったのだろうか。したがって、*Cil.*が書かれた時には、マニメーハライはすでに仏教徒としての性格を確立していて、新たに改変することはできなかったという可能性を完全に否定することはできない。

3. 相互の影響

*Cil.*が先に書かれていれば、*Cil.*の記述が*Mami.*に影響を与え、*turavu*の意味も*Cil.*の影響下にある、という考え方は可能である。しかし、*Cil.*では髪の毛を引き抜いたと描写されたマニメーハライは、*Mami.*では美しい豊かな髪を備え、宝石を身に帯びた様子が描かれているなど、両叙事詩における描写が一致しているわけではない。

たとえ *Cil.*の方が *Maṃi.*より、先に書かれたとしても、*Maṃi.*の作者は、*Cil.*の荒筋だけを取り入れて、*Maṃi.*を作ったということも考えられる。したがって、たとえ *Cil.*の方が先に書かれていたとしても、両叙事詩における *tuṛavu* については、それぞれ独自の解釈がなされて、異なった意味で用いられたという可能性を捨てることはできない。

V. 結論

*Cil.*を除いた作品の用例には、*tuṛavu* を「出家、すなわち、(尼) 僧になること」と解釈するだけの十分な根拠は存在しない。また、*Maṃi.*において初めて、*tuṛavu* にそのような新しい意味を持たせたという明白な意図も見受けられない。唯一、*Cil.*の用例だけが、「出家、すなわち、(尼) 僧になること」という解釈を可能にしてはいるが、現時点では上に述べたように両叙事詩の前後関係や相互の影響は明らかになってはおらず、*Cil.*における解釈を適用することはできない。

したがって、これまで「出家、すなわち (尼) 僧になること」という意味に限定してとらえられてきた *Maṃi.*における *tuṛavu* については、他の文献における用例や双子の叙事詩の前後関係についての問題を踏まえて、「世俗的な欲望、執着を捨てること」、「遁世」という解釈を文脈に即して行なうべきではないだろうか。

<略号>

<i>Cil.</i>	<i>Cilappatikāram</i>
DEDR	<i>Dravidian Etymological Dictionary, 2nd edition</i>
<i>Kuṛaḷ.</i>	<i>Tirukkūṛaḷ</i>
<i>Maṃi.</i>	<i>Maṃimēkalai</i>
<i>Nāl.</i>	<i>Nalatiyār</i>
S.I.S.S.W.P.S.	The South India Saiva Siddhanta Works Publishing Society
Skt.	Sanskrit
UVS 注	U. V. Swaminatha Iyar の注

(注記)

- ¹ 原語は *kural-talai-k-kūntal-kulaintu-piṅ vīla*, 直訳すると「花のつぼみを-てっぺんに持つ-髪が-ゆるんで-後ろに-落ちて」。
- ² 原語は *poṅ-toṭi-mātar*, 「金の-腕輪を持つ-女」。
- ³ 原語は *mai-m-malar-kulali*, 直訳すると「黒い-花を持つ-髪の女」。
- ⁴ *aṅi-y-iḷai*, 「美しい宝石」。被修飾語は示されていないが、これだけで「美しい飾りを持つ女」を意味する。この修飾方法は *aṅmolittokai* といい、タミル古典文学で頻繁に用いられている。タミル最古の文法書 *Tolkāppiyam-collatikāram* 418, 中世の文法書 *Nannūl* 369 で取り上げられている。Skt.の *bahuvrīhi* に似ているが、*aṅmolittokai* の場合、被修飾語が明示されることはない。

- ⁵ 原語は *pikkunī* < Pāli. *bikkunī*.
- ⁶ Paula Richman は、マニメーハライは物語の冒頭からすでに出家していると考えている。Shu Hikosaka は、彼女は物語の最後で出家したと指摘している。
- ⁷ マニメーハライの序章には、この作品のタイトルが、*Maṇimēkalai tuṛavu* である、とも書かれている。
- ⁸ 主に1世紀から3世紀にかけて作られたタミル古典文学作品は、当時存在していたとされる文芸院の名にちなんでサンガム文学と呼ばれている。これらの詩は、後に『八つの詞華集』、『十の長詩』とにまとめられた。
- ⁹ 『八つの詞華集』の1つ。4~8行の恋愛詩400からなる。
- ¹⁰ 『八つの詞華集』の1つ。英雄詩400からなる。
- ¹¹ 6世紀頃の箴言詩集。3編133章、1330行の2行詩からなる。作者はティルヴァッルヴァル。作品の性格から彼はジャイナ教徒であったと考えられている。
- ¹² 7世紀後半のジャイナ教徒の箴言詩集。3編40章、400の4行詩からなる。パドゥマナールが、ジャイナ教徒の箴言詩を集めて、内容ごとに分類して編纂したものである、といわれている。
- ¹³ *Kuṛaḷ* が *Maṇi* より先に書かれたことは確かである。*Nāl* には、*Muttaraiyar* という首長の名が登場し、この *Muttaraiyar* は碑文にも記述されていることから、*Nāl* の上限年代は680年とされている。さらに、これに依拠しない年代論もある。*Maṇi* の年代に関しては、様々な説があり、*Nāl* の上限年代の前後どちらにも決定できない。
- ¹⁴ 高橋孝信氏は、『ティルックラール-古代タミルの箴言集』で、この *tuṛavu* に「出離」という訳を当てている。高橋氏との談の中で、*Kuṛaḷ* の第37章「欲を断つこと (*avāraṭṭal*)」との関係を踏まえた場合、この *tuṛavu* については「執着を捨てる」という解釈よりも、「出離」という解釈がふさわしい、とご教授いただいた。
- ¹⁵ 原語は、*mā-tavar uṛa-i-v-iṭam-pukuntēṅ*。「偉大な-聖者が-住む-場所に-私は入った」。UVS 注はこの偉大な苦行者を、「仏教のサンガの人」として、この場所をサンガと考えている。しかし、この偉大な苦行者はアラヴァナであるとも考えられるので、この場所はただアラヴァナの住んでいる場所であるとも解釈できる。あるいは、もちろんアラヴァナを含めたサンガの人々が住む場所を示すのかもしれない。いずれにせよ、この部分だけから確定するのは困難である。*Maṇi* 2:13 では、この場所が美しい花の館であるといわれている。
- ¹⁶ 原語は *cilam* < Pāli *śīla*。当然、仏教の5戒を意味すると思われるが、*Maṇi* の他の箇所でも、5種の内容までは述べられていない。
- ¹⁷ 原語は *uy*。 *Tamil Lexicon*、および、*DEDR* 645 に、*"to live, subsist, be saved, be relieved (from trouble), escape (as from danger)"*、とあることから、この「救われる」とは、「解脱」を意味するのではなく、単に「苦しみや悲しみから救われる」という意味である。
- ¹⁸ *tuṛavi* は *tuṛavu* と同じく動詞 *tuṛa* の動名詞形である。
- ¹⁹ *intira-vikāram*。両叙事詩に登場する、カーヴェリーパッティナムにある寺院の名前。
- ²⁰ UVS 注はこれを解脱（ニルヴァーナ）であると解釈している。
- ²¹ 原語は *ara-k-katir-āli*、「徳の-光の-輪」。*Maṇi* では「法輪を回す」という言葉がしばしば使われるので、ここも「法輪」と訳した。
- ²² 原語は *mā-tavar*、直訳すると「偉大な-苦行を持つ男」。タミル語 *tavam* の語源は *Skt. tapas* である。
- ²³ カーンチーの国が飢餓に見舞われた時に、カーンチーの王が「行なった苦行が間違ったのであろうか。 (*cey-tavam-piḷaittō*)」と言う (*Maṇi* 28:188)。
- ²⁴ 原語は *tuṛam*。 *tuṛam* も *tuṛavu* と同じく、*tuṛa* から派生した名詞形である。
- ²⁵ 原語は *pōti-tāṇam* (< *Skt. bhodi-dhāna*)。具体的な内容は不明である。ボーディという布施と読むべきか、あるいはブッダに対する布施であると読むべきかについても不明である。

- ²⁶ 原語は *kaḷai*。これまで、この部分は「髪を切る」と訳されてきたが、動詞 *kaḷai* の意味は、あくまで「(引き) 抜く」であり、「切る」という意味はない。
- ²⁷ ここは「~のように」と補う注釈にしたがったが、原文に「~のように」を表す言葉はない。また、「天空人」が具体的にどのような人であるのかは不明である。
- ²⁸ *Mamī* には注釈は存在しないが、*Cil* には完全ではないものの、この *Aṭiyārkkunallār* の注釈がある。
- ²⁹ Vaiyapuri Pillai, *History of Tamil language and literature*, New century book house, Madras, 1988 (2nd ed.; 1st ed. 1956), p. 109. “The Manimēkalai is the earlier of the two kāvyas, Adiyārkkunallār specifically mentions this fact at the end of his uraiṭṭāyiram.”
- ³⁰ K. Zvelevil, *The Smile of Murugan*, E.J. Brill, Leiden, 1973, p. 173.
- ³¹ 二大詞華集の 1 つ *Eṭṭutokai* に取められている 400 の詩から成る作品。
- ³² K. Zvelevil, *The Smile of Murugan*, p. 173. Brenda E. F. Beck, “The Study of a Tamil Epic: Several Versions of Silappadikaram Compared.”, *Journal of the Institute of Asian Studies*, no.1, pp. 23-38, Institute of Asian Studies, Madras, 1972.
- ³³ *Mamī*. 26:2-4 において、カンナギとコーヴァランを神として彫った像について言及されている。しかし、*Cil* ではコーヴァランは神となっていない。したがって、Kandaswamy は、*Cil* が先に書かれたとする根拠の 1 つをしてこの挿話を挙げている。*Cil* が先に書かれたとする Kandaswamy の根拠については、*Buddhism as expounded Manimekalai*, pp. 42-46 を参照。
- ³⁴ K.K. Pillai, *A Social History of the Tamils*, University of Madras, Madras, 1975, Vol.1, p. 128 で、*Mamī* は多くの物語が杣物語に挿入されるため、ただ 1 人の作者によって作られたものではないと述べられている。
- ³⁵ T.P. Meenaksisundran, *A History of Tamil Literature*, Annamalai University, Annamalainagar, 1965, p. 34, “a careful reading shows that this epic could have meant nothing to an audience which was not familiar with Cilappatikāram.” *Buddhism as Expounded in Manimekalai*, p. 46, “Manimekalai is the sequel to Cilappatikāram.”
- ³⁶ *Mamī*. 26:15-32.
- ³⁷ この個所に関する UVS 注も、*Cil* の挿話をもとに解釈している。
- ³⁸ *Cil* の作者がジャイナ教徒であるとはっきり述べられている個所はないが、一般的にはジャイナ教徒による作品であるとされている。また、ジャイナ教徒の作品は、他の宗派に比べると宗教色が強く打ち出されていないという特徴を持っている。この特徴は *Kuṇḍal* においても見られる。
- ³⁹ 『ジャータカ』442, 539 にはマニメーハラー女神が登場し、海で遭難した人を助けるといふ話がある。*Cil* と *Mamī* との双方で、コーヴァランの祖先が海で遭難した時に、マニメーハラー女神によって助けられたという類似した話が語られる。Sylvain Levi はマニメーハラー女神の伝説が東南アジアまで広がっていることを指摘している。Sylvain Levi, “Maṇimekhalā, Devinite de la Mer”, “On Maṇimekhalā, The Guardian Deity of the Sea”, More on Maṇimekhalā”, Memorial Sylvain Levi, Rue Cujas, Paris, 1937. を参照。
- ⁴⁰ カンナギやコーヴァランの死を知った後、コーヴァランの母は悲しみに死に、カンナギの父はジャイナ僧に布施を行って徳を得て、カンナギの母は命を捨てる。マニメーハライ、マーダヴィ、コーヴァランの父という *Mamī* においても仏教徒として登場する人物だけが、*Cil* においても仏教徒となることは注目すべきである。

<使用したテキスト>

Cāminātaiyar, U.Vē. (ed.), *Maṇimēkalai*, U.V.Swaminatha Iyar Library, Madras, 1981. (Reprint; 1st ed., 1898)

Vēnkaṭacāmi, Na. Mu. and Turaicāmi, Cu. (ed.), *Maṇimēkalai*, S.I.I.S.S.W.P.S., Madras, 1994. (Reprint; 1st ed., 1985)

Vēnkaṭacāmi, Na. (ed.), *Cilappatikāra mūlamum*, S.I.S.S.W.P.S., Madras, 1942.

Pālacuntaram, Ti. Cu. (ed.), *Nālaṭiyār*, S.I.I.S.S.W.P.S., Madras, 1999. (Reprint; 1st ed., 1945)

Tirukkuraḷ mūlamum Parimēlaḷakaruraiyum, S.I.I.S.S.W.P.S., Madras, 1995. (Reprint)

<参考文献>

Hikosaka, Shu [1989] *Buddhism in Tamil Nadu, A New Perspective*, Institute of Asian Studies, Madras.

Kandaswamy, S.N. [1978] *Buddhism as Expounded in Manimekalai*, Annamalai University, Annamalainagar.

Pope, G.U. (tr.) [1984] *The Naladiyar*, Asian Educational Services, New Delhi. (Reprint; 1st ed., 1893)

Pope, G.U.(tr.) [1984] *'Sacred' Kural*, Asian Educational Services, New Delhi. (Reprint; 1st ed., 1893)

Richman, Paula [1998] *Women, Branch Stories, and Religious Rhetoric in A Tamil Buddhist Text*, Syracuse University (Maxwell School of Citizenship and Public Affairs), New York.

高橋孝信 (訳), 『ティルックラルー古代タミルの箴言集』, 平凡社東洋文庫, 1999.

2001.1.1 稿

みやもと じょう 東京大学大学院博士課程

1. Introduction In *Maṇi*, the heroine Maṇimēkalai is described as wearing jewels with ornaments and flowers in her beautiful long hair throughout much of the story, whereas in some parts she appears to be a nun. Among scholars, therefore, opinions vary as to the renunciation of Maṇimēkalai. Some say that she is a nun from the beginning of the story, while others maintain that she became a nun at the end of the story. One of the terms that is associated with the debate on the renunciation of Maṇimēkalai is *tuḡavu*. The term *tuḡavu* is defined as “to leave, relinquish, forsake, renounce worldly pleasures.” *Tuḡavu in Maṇi*. is interpreted to mean becoming a priest or a nun, and the above studies have been done on the basis of this interpretation. The meanings of several terms in *Maṇi*. are often ambiguous, for *Maṇi*. is the only Tamil Buddhist epic that is preserved in its entirety, and in addition no traditional commentary is attached to it. This fact makes it difficult to clearly define the meanings of terms in *Maṇi*. This paper, therefore, focuses on the question of how to define *tuḡavu* in *Maṇi*. by investigating examples of *tuḡavu* in works prior to *Maṇi*. and *Cil*.

2. Examples of *tuḡavu*

(a) Sangam literature: In Sangam literature, *tuḡavu* and its verbal form *tuḡa* mostly mean to leave or forsake [someone/something]. Only one example in *Puṟaṅṅāṇṇūru* 363 means to renounce (the world). But there is no concrete evidence to interpret this *tuḡavu* as becoming a priest or a nun.

(b) Didactic works: Chapter 35 of *Kuṟaḷ*. and Chapter 6 of *Nāl*. are titled *Tuḡavu*. From this it is assumed that at the time these didactic works were written, the word *tuḡavu* already had some clear sense and so became the title of a chapter in these works. From the repeated admonition to abandon worldly attachment and the content of *Kuṟaḷ*. 344, 345, *tuḡavu* should mean to abandon attachment or to leave worldly pleasures. On the other hand, *tuḡavu* in *Nāl*. may mean to renounce the world, for *Nāl*. 54 refers to quitting the household paths. But in either case, it must be noted that these verses do not indicate that the word *tuḡavu* means abandoning attachment or leaving worldly pleasures in order to become a priest or a nun.

(c) *Maṇi*.: In one scene, Maṇimēkalai’s mother relates how she embraced Buddhism (*Maṇi*. 2:41-69). By the word *tuḡantēṇ* which she uttered then, it is generally thought that she became a nun. But on that occasion, she just received the five *sīlas*, and there is no clear evidence to conclude that she became a nun. In other scenes, it is not clear that she is a nun either. On the basis of the interpretation that we have noted, it is probable that she abandoned worldly attachment or pleasures. Based on branch stories where several characters relate the events which caused them to embrace Buddhism, some researchers have concluded that they were priests or nuns. In fact, however, these stories lack

concrete expressions regarding as to whether they were priests or nuns, and it is doubtful that they were so. When we judge the meaning of *tuḡavu* in *Maṇi.* from its context, even if it means to renounce the world, it would be difficult to interpret it as becoming a nun.

(d) *Cil.*: Contrary to the examples that we have seen above, some instances of *tuḡavu* in *Cil.* contain the sense of becoming a priest or a nun. There is an expression “pluck her hair with the garland and jewels” in the description of *tuḡavu* related to Maṇimēkalai (*Cil.* 1-28) . Thus this *tuḡavu* does mean to become a nun. By the expression “to pluck the hair, ” it is clear that this *tuḡavu* strongly manifests the character of Jainism. Furthermore, from the description of another scene, we can judge that *tuḡavu* in *Cil.* can be interpreted as becoming a priest or a nun. We cannot, however, apply this interpretation in *Cil.* to *tuḡavu* in *Maṇi.*, for the chronological order of the composition of *Cil.* and *Maṇi.* has yet to be determined. Because the descriptions of Maṇimēkalai in the two epics do not coincide, even if *Cil.* was written earlier than *Maṇi.*, the probability that *Maṇi.* might have been composed by borrowing only the outline from *Cil.* still remains. Therefore, another possibility that the meaning of *tuḡavu* in the two epics may differ should also be taken into consideration.

3. Conclusion Although *tuḡavu* in *Maṇi.* has so far been limited to the sense of becoming a nun, there is no plain evidence in the works antedating *Maṇi.* to assume that *tuḡavu* in *Maṇi.* means to become a nun. Consequently, we should interpret it in a broader sense such as “to leave worldly pleasures, to abandon attachment, and to renounce the world.”

<abbreviations> *Cil.*: *Cilappatikāram*; *Kuḡaḷ.*: *Tirukkūḡaḷ*, *Nāl.* : *Nalaṭyār*; *Maṇi.*: *Maṇimēkalai*.